

日本英語学会第32回大会発表要旨

〈研究発表〉

第一室 (11月8日午後)

司会 小畑美貴 (東京理科大学)

「VP 削除からみた心理動詞の項交替」

梶本顕士 (北海道教育大学)

中村太一 (福井大学)

心理動詞 (anger, bother, worry 等) は、3つの交替形 (John worried about Mary's poor health. / John was worried about Mary's poor health. / Mary's poor health worried John.) を持つ。自動詞形と受動形では、経験者項と感情の対象項が具現化し、使役形では、原因項と経験者項が具現化する。本論では自動詞形と受動形には同一の動詞句構造が与えられ、一方使役形にはこの基本構造を軽動詞 v_{cause} が補部を取る構造が与えられると提案する (Folli and Harley (2006 [1])). 本提案により、上記 3 つの交替形が動詞句削除において示す振る舞いに、統語的・意味的同一性の観点から (Merchant (2013 [2])), 統一的説明が与えられることを示す。また、本提案の帰結として、Target / Subject Matter の共起制約 (Pesetsky (1995 [3])), 非頭在的な項の扱い、他の動詞類の交替形の統語構造等について得られる新たな知見について論じる。

[1] "On the Licensing of Causatives of Directed Motion: Waltzing Matilda All Over" [2] "Voice and Ellipsis" [3] *Zero Syntax: Experiencers and Cascades*.

「英語の緊密同格表現に関する一考察」

岸 浩介 (東北学院大学)

英語では、カンマを用いた弛緩同格 (Sterne, the author of *Tristram Shandy* (Burton-Roberts (1975 [1]))) と、それを用いない緊密同格 (the poet Burns ([1])) が多くみられる。後者の緊密同格は、弛緩同格と異なり、(1) 文副詞が生起できない (McCawley (1998 [2])), (2) 2 つの名詞句が合成的に 1 つの個体を指す ([1])、(3)

生起する冠詞が定冠詞 the に限定される ([1])、(4) 関係節での言い換えができない ([1])、などの特徴を持つが、極小主義理論の枠組みでこれらを統一的に説明した先行研究はまだないように思われる。そこで、本論では、緊密同格がコピュラ文に対応すると仮定し (cf. 安井 (1987 [3])), フェイズの機能を持つ小節構造 (cf. Den Dikken (2006 [4])) から派生されると主張する。その結果、上述の特徴が首尾良く説明されるだけでなく、派生をフェイズ単位で行うと主張する近年の極小主義理論に対して支持根拠が与えられると論じる。

[1] "Nominal Apposition," *FL* 13. [2] *The Syntactic Phenomena of English (2nd Ed.)*, The Univ. of Chicago Pr. [3] 『現代英文法事典』大修館. [4] *Relators and Linkers*, MIT Pr.

「日本語における所有表現と形容詞の統語構造」

辰己雄太 (大阪大学大学院)

Larson and Cho (2003 [1]) は John's old car などの名詞句に観察される解釈の曖昧性を分析し、その曖昧性を統語構造の曖昧性へと還元する分析を提案した。この解釈の曖昧性は「太郎の古い車」のような日本語の名詞句においても観察され、この名詞句は「太郎が所有している車があり、かつそれは古い」という解釈と「太郎が以前に所有していた車」という二つの解釈を持つ。Larson and Cho (2003) の提案が日本語にも当てはまることが期待されるが、日本語の名詞句内に現れる所有表現は、語順の制約などの点で英語とは異なるため、Larson and Cho (2003) の提案をそのまま日本語に用いることは出来ない。この点を踏まえ、本研究では問題となっている解釈の曖昧性を、名詞句を修飾する形容詞の統語構造の観点から分析する。

[1] "Temporal Adjectives and the Structure of Possessive DPs," *Natural Language Semantics* 11.

第二室 (11月8日午後)

司会 土橋善仁 (新潟大学)

「コントロール構文における従属節 force の役割」

松田麻子 (お茶の水女子大学大学院)

既存研究の多くは補文コントロールを義務的コントロールに分類する。しかし、補文コントロールが必ずしも「義務的」ではないことを示す文例 (split control, partial control, control shift など) も古くから指摘されている。こういった文例は、従属節の空主語と主文 DP の指示対象が完全には一致しないという点で義務的コントロールの定義から逸脱する。とはいえ、空主語の解釈は完全に恣意的ではなく、そこには何らかの制約がある。本発表では、日本語の補文コントロールの考察を土台に、この制約を適切に捉える分析を提案する。従属節が独自の force を持ち、その force が主語の人称素性に制約を課すという考え方 (Portner (2004 [1])) がこの分析の要となる。また、従属節の force は主節の述語によって意味的に選択される (Grimshaw (1979 [2])) と考える。この分析によって、様々な補文コントロール現象がミニマリズムの要請に見合った簡潔な形で説明可能となる。

[1] “The Semantics of Imperatives within a Theory of Clause Types,” *Proceedings of SALT* 14.
[2] “Complement Selection and the Lexicon,” *LI* 10.

「統語論における修復操作としての of 挿入」

北田伸一 (東京理科大学)

本発表の目的は統語論における修復操作を提案することである。極小主義プログラムの枠組みにおいては、ある一定の派生段階に達すると統語構造が意味解釈と音声解釈のインターフェイスに転送される。この統語構造には、インターフェイスにとって判読可能な情報のみが含まれていなければならない。もし判読不可能な情報を含む場合、インターフェイスレベルにおいて修復がなされる。本発表では、統語論においても修復が行われると主張する。具体的には、The question (of) whether

it is true or not may be raised. の文に見られる of 挿入 (of-insertion) の随意性ならびに I heard a rumor (*of) that John was guilty. の文に見られる of 挿入の義務性が、統語論におけるラベル付与 (Chomsky (2013 [1])) に関わる修復操作の帰結として説明されることを論じる。

[1] “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33-49.

「抜取り操作に関する定形付加詞と非定形付加詞の対照性」

吉村理一 (九州大学大学院)

英語では、Taylor (2007[1]) が指摘しているように文末生起の条件節をはじめとする定形付加詞からの抜取り操作は一切禁止される。しかし、同じ文末生起の付加詞でも非定形の場合は抜取りが許される例が数多く存在する。

本発表では、Haegeman (2006[2]) の副詞節を中核的なものと周辺のものに分類する分析を援用し、定形付加詞が中核的副詞節に分類されることを確認した上で、抜取り操作の適用禁止が中核的副詞節の内部構造に起因することを論じる。他方、抜取り操作を許す非定形付加詞は TP 構造であることを示し、主節のフェイズ主要部からアクセス可能であることを提案する。

[1] “Movement from IF-clause Adjuncts,” *UMWPL* 15. [2] “Argument Fronting in English, Romance CLLD, and the Left Periphery,” GU Press.

第三室 (11月8日午後)

司会 花崎美紀 (信州大学)

「合意形成談話における相互行為の言語文化比較：日本語・韓国語・英語の比較分析」

藤井洋子 (日本女子大学)

本研究は、ミスター・オー・コーパスと呼ばれる異言語間比較が可能なデータベースを使用し、日本人、韓国人、アメリカ人のペアによる課題達成の共同作業における言語実践を観察・分析し、それぞれの言語文化による相互行為の様態を明らかにする。その上で、相互行為という「場」を舞台に展開される言

語実践の異なりは、その母語話者である参与者に刻印されている文化的、社会的背景の投影と考え、その根底にある文化に裏付けられた自己観の捉え方の異なりというメタ概念まで踏み込んだ考察を行う。

分析の結果、日本人は相互協調的な言語行動を取りながら作業を進めており、一方、アメリカ人の相互行為では、個対個の対峙の形が観てとれた。また、韓国人は、日本人と近い方法で相互行為が行われていた。この結果は、それぞれの言語文化が多くの場面で所与のものとしている自己と他者の位置づけの異なりと深く関わっていると考えられる。

「日本語と英語の修辭疑問について」

藤井友比呂 (横浜国立大学)

(1)は修辭疑問としての解釈をもち、話者の意図するところは、No-one understands English である。after all を文頭におくと、普通疑問の読みは消え、修辭疑問の解釈のみが生じる(1)。

(1) After all, who understands English?

[2]は、(A) ここで wh トイウノ文と呼ぶ(2)のような日本語の構文を wh 修辭疑問であるとし、(B) それが日本語の普通疑問と異なり島の制約に従うと主張している。

(2) 誰が英語が理解できると言うの？

本稿は、[2]の主張のうち、(A)は正しく、(B)は誤っていることを示す。

具体的には、トイウノ文が英語の修辭疑問同様、否定バイアスのかかった文脈を要求し、NPI を認可することを示したのち、wh トイウノ文が英語の wh 修辭疑問と異なり、(そして日本語の wh 普通疑問文と同じく)島の効果を示さないことを観察する。

[1] Sadock, J.M. 1971. Queclaratives. *CLS* 7.

[2] Sprouse, J. 2007. Rhetorical Questions and Wh-movement. *LI* 38.

「直接引用文の文法特性」

廣江 颯 (長崎大学)

本発表では、直接引用文(direct quote: DQ)の文法特性について考察を行う。DQ を伴う文構造の研究は行われてきたものの (Collins (1997)など)、DQ そのものの構造については

研究対象として取り上げられることがあまりなかった。本発表では、DQ が示す文法特性、特に DQ の付加部としてのステータスと主節現象(main clause phenomena: MCP)が観察されることに注目し、MCP が生じるメカニズムを提案する。また併せて、DQ が適切に解釈されるための LF インターフェイス条件も考察したい。

[1] Collins, Chris (1997) *Local Economy*, MIT Press. [2] Hopper, J. and S. Thompson “On the Applicability of Root Transformations,” *LI* 4.

第四室 (11月8日午後)

司会 柳 朋宏 (中部大学)

「仮主語 it を伴う外置構文の派生について」

近藤亮一 (名古屋大学大学院)

現代英語には、仮主語 *it* と *that* 節を伴う二種類の外置構文が存在する。一つは、連結動詞と NP または AP で構成される述部を持ち(*It is obvious that the world is round.*)、もう一つは、述部として連結動詞のみを含む(*It seems that Ralph already skimmed the milk.*)。本発表では、この二種類の外置構文において *it* が併合される位置が異なると主張する。具体的には、前者の *it* は *that* 節の主要部 C にある EPP 素性を満たすために CP 指定部に併合され、その後主節の TP 指定部に移動するが、後者の *that* 節の主要部 C は EPP 素性を持たず、*it* は主節の TP 指定部に直接併合されると提案する。この提案に基づけば、PRO のコントロール、抜き出し可能性、文主語構文への言い換え可能性に関する二種類の外置構文の違いが、原理的に説明されることを示す。

[1] Stroik, Thomas (1996) “Extraposition and Expletive-Movement: A Minimalist Account,” *Lingua* 99, 237-251.

「英語史における場所句倒置構文の発達」

小池晃次 (名古屋大学大学院)

場所句倒置構文(以下、LIC)に関する通時的研究は極僅かしかなく、そこでは LIC は暗黙裡に単なる V2 現象の一例であると見なされてきた。故に、古・中英語における LIC の統

語構造については、実際のところ未解明の部分が多く、その歴史的発達の道筋も明らかとされていないのが現状である。本発表では、Koike (2013 [1])による現代英語におけるLICの分析とNawata (2009 [2])による古・中英語におけるV2の分析を組み合わせながら、古・中英語におけるLICについて、3タイプの統語構造を提案する。そして近代英語以降、標準的なV2構造である1タイプは消失したのに対して、残りの2タイプはその後生き残ってきたと論ずる。これによって、V2現象消失後も、なぜLICはV2の倒置構文として存在しているのかに、率直な説明を与えられることを示す。

[1] “Two Types of Locative Inversion Construction in English,” *EL* 30, 568-587. [2] “Clausal Architecture and Inflectional Paradigm,” *EL* 26, 247-283.

『アーサー王の死』出版史におけるフィールドの新版 (2013)

高宮利行 (慶應義塾大学)

マロリーのアーサー王ロマンスはキャクストン版 (1485) に始まって、繰り返された再版には直前の版が印刷用原稿に用いられてきた。本書は愛読されることはあっても、長く研究の対象にはならなかった。しかし1934年に写本が発見され、これと印刷本を英仏の種本と比較校訂したヴィナーヴァ版 (1947 [1]) の出現で、多くの言語分析研究が生まれた。日本人研究者の功績も顕著であった。ところがヘリング (1982) が写本の数葉に印刷活字やインクの跡を発見すると、キャクストン版に植字工が改竄した個所があることが明らかになった。こういった新たな発見を意識したフィールドの新版 (2013 [2]) が、マロリー学でどういう意味を持つのかを検討してみたい。

[1] *The Works of Sir Thomas Malory*, ed. by E. Vinaver, Oxford UP, 1947; 3rd ed. revised by P. J. C. Field, 1990. [2] *Sir Thomas Malory, Le Morte Darthur*, ed. by P. J. C. Field, Brewer, 2013.

第五室 (11月9日午前~午後)

司会 松本マスミ (大阪教育大学)

「CP領域のカートグラフィーに基づいた主格・属格交替現象の統語論的分析」

小菅智也 (東北大学大学院)

本発表では日本語の主格属格交替現象について論じる。日本語の属格主語の認可に関しては、Dが認可するというMiyagawa (2011[1]) 等による分析と、述語連体形形成に関わるCが認可するというHiraiwa (2001[2]) 等による分析の二つの立場が対立している。本発表では、(1) のような例、つまり、節が名詞「はず」(cf. 「そのはず」) の補部に生じており、かつ、述語の形態が連体形であるにも関わらず、属格主語が許されない例を扱う。(1) その部屋 {が/*の} きれいなはずだ。具体的には、C分析の立場をとりつつ、(i) 述語連体形形成の接辞と属格付与の機能範疇を区別すべきであること、(ii) 連体修飾節を伴う名詞には、その動詞性に依じて、少なくとも二つの生起位置を仮定する必要があることを主張する。

[1] “Genitive Subjects in Altaic and Specification of Phase,” *Lingua* 121. [2] “On Nominative-Genitive Conversion,” *MIT Working Papers in Linguistics* 39.

「Why, What...for, How Come そして Why the Hell」

遠藤喜雄 (神田外語大学)

Shlonsky and Soare (2011[1])は、whyがIP内部のReasonPに基底生成されるとした。本発表では、what...forを用いて、2つのReasonPがあることを見る(Endo 2014[2])。次に、how comeを取り上げ、その基底生成の位置をCP主要部とするCollins (1991[3])やForcePの指定部とするTsai (2008[4])に対し、それがHaegeman and Hill (2014[5])のSpeech-actPの指定部に基底生成されることを見る、最後に、why the hellを議論する。

[1] “Where is ‘why’?” *Linguistic Inquiry* 42, [2] “Two ReasonPs” in Shlonsky (ed.) *Beyond Functional Sequence*, Oxford. [3] “Why and how

come” *MIT Working Papers in Linguistics* 15, [4] “Left peripheries and *how-why* alternations” *JEAL*17, [5] “Vocatives and Speech Act Projections” In Cardinaletti, Cinque and Endo. (eds.). *On peripheries*, Hitsuzi.

司会 小川芳樹 (東北大学)

「補文標識一致と素性継承」

大塚知昇 (九州大学大学院)

Chomsky (2008 [1])は、統語操作の引き金となる解釈不可能素性がフェイズ主要部に存在し、これが補部の主要部に継承されて統語操作が駆動されると提案した。この素性継承理論は、当初は明確な動機づけを欠いていたが、Richards (2007 [2])により強力な理論的動機付けが与えられた。彼によると、解釈不可能素性の照合と転送が同時に生じねばならないという想定に基づけば、フェイズ主要部上の解釈不可能素性は、照合される際に転送領域である補部に継承されねばならない。

しかしこの動機付けは“解釈不可能素性はフェイズ主要部上で照合されてはいけない”という予測を導き、Haegeman and Koppen (2012 [3])らが示した補文標識一致の例はこれに対する反例となる。本発表ではこの反例が、分離 CP 構造の想定と、素性継承をフェイズ主要部が c 統御する主要部すべてに対して可能であると拡張することで説明ができると示し、素性継承理論と Richards (2007)の動機づけの擁護を試みる。

[1] “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory*. [2] “On Feature Inheritance,” *LI* 38. [3] “Complementizer Agreement and the Relation C^0 and T^0 ,” *LI* 43.

“The Acquisition of the Nominative Object in Japanese and the UPR”

Tetsuya Sano (Meiji Gakuin University)

Wexler (2004) [1] has proposed that developmental delays of verbal passives and unaccusative structures are due to Universal Phase Requirement (UPR). Hirsh and Wexler (2007) propose that UPR holds until around age 7, while explaining a certain developmental delay of

raising structures as well by UPR. I would like to point out that UPR makes a certain prediction on the acquisition of the nominative object in Japanese. UPR predicts that immature children below around age 7 cannot check nominative Case of the object in the nominative object construction, given an analysis of the nominative object construction in Takahashi (2010). I will discuss this prediction with my experimental data with Japanese monolingual children around age 5.

[1] Wexler, K. (2004). “Theory of phrasal development: perfection in child grammar,” *MIT Working Papers in Linguistics* 48, 159-209.

“A Doubling Constituent Account of Relative Clause and Binding Facts”

Jason Ginsburg (Osaka Kyoiku University)

In this paper, I adopt a modified version of Kayne’s (2002 [1]) view that certain co-reference relations originate within a doubling constituent structure that consists of a pronominal head and a coreferenced r-expression (r-expr) complement of the form [pronoun r-expr]. Second, I propose that when a phase (Chomsky 2001 [2], etc.) becomes complete (i.e., there are no uninterpretable features in the phase head and all theta-roles are assigned), unlicensed elements within it become accessible to further operations, such as probe-goal search. I demonstrate how this phase-based doubling constituent analysis provides a unified account of basic relative clause constructions and typical binding data (Chomsky 1981 [3], etc.), including puzzling data from Munn (1994 [4]) involving the interaction of a relative clause and a picture-DP.

[1] “Pronouns and their antecedents,” *Derivation and explanation in the Minimalist Program*, ed. by Samuel David Epstein & T. Daniel Seely, 133–166, Blackwell, Malden, MA. [2] “Derivation by phase,” *Ken Hale: A life in language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52, MIT Press, Cambridge, MA. [3] *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht. [4] “A Minimalist account of reconstruction asymmetries,” *Proceedings of NELS 24*, ed. by Merce Gonzalez, 397-410, GLSA, Amherst, MA.

第六室 (11月9日午前～午後)

司会 本多 啓 (神戸市外国語大学)

「様態・結果の相補性からみた動詞 move」

出水孝典 (神戸学院大学)

Rappaport Hovav らは一連の論文 ([1]など) で動詞の意味に様態・結果の相補性が見られることを主張してきた。だが、Beavers ら (2010)[2]は、John moved stealthily out of the bedroom. という例を挙げ、この場合、様態が stealthily、結果が out of the bedroom で表されているので、動詞 move は移動のみを表しており、第三の選択肢だとする。このような例の存在は、様態・結果の相補性にとって問題となる。しかし、Rappaport Hovav ら(2010)[3]は、様態を尺度のない変化、結果を尺度のある変化で置き換えている。それに従うと、move は尺度のない変化を表し、walk, など他の移動様態動詞と同じ分類に入るため相補性とも矛盾しなくなり、さらに彼女らの新しい尺度に基づく分類の優越性を示す根拠となることを、様々な証拠を挙げて示す。

[1] “Building Verb Meanings” [2] “The typology of motion expressions revisited,” *J of L* 46. [3] “Reflections on Manner/Result Complementarity”

「英語の「左方転位」構文における転位要素と照応表現の意味関係について」

山内 昇 (名古屋大学大学院)

左方転位に関する研究では、転位要素と照応表現には同一指示の関係が成立するとされている (e.g. Lambrecht (2001 [1])). しかし、Windows, doors, beds, dressers — everything (in the room) was burned to a crisp. という例では、but chairs, tables, and racks were not burned という節を後続させることができないため、照応表現の everything は個々の転位要素を受けているのではなく、転位要素から想起される上位カテゴリーを受けていると考えられる。従って、この例では転位要素と照応表現に同一指示以外の関係が成立している。本発表では、カテゴリー化の研究 (Rosch (1978 [2]) や Overstreet (1999 [3]) 等々) を手がかりにしな

がら、複数個の要素が転位される場合に、なぜ転位要素と照応表現の間に同一指示以外の関係が成立するのかを考察する。結論として、転位要素と照応表現の関係づけにはカテゴリー化の仕組みが働いているため、同一指示以外の関係が成立すると主張する。

[1] “Dislocation,” *Language Typology & Language Universals*, Vol. 2. [2] “Principles of Categorization,” *Cognition & Categorization*. [3] *Whales, Candlelight, and Stuff Like That*.

司会 小野 創 (津田塾大学)

「複数の依存関係を含む文の統一的説明にむけて」

塩原佳世乃 (東京女子大学)

本論文は、wh 句移動、かき混ぜ操作、XP 転移などに見られる依存関係を複数含む文 (例: How many cakes and how many letters (respectively) did Mary bake and John write this morning?) について、音韻論的な分析を提示し、この分析が統語部門と音韻部門の在りようについて何を示唆するかを探る。さらに、複数の依存関係を含む文において、依存関係の方向性が左右のいずれであっても依存に関与する複数の要素の線的順序は問わないことを示した上で、これらの文が“(文) 端重心”を得て文処理を容易にする効果があることを主張する。

「多段階語彙挿入から見た動詞不変化詞結合」

納谷亮平 (筑波大学大学院)

動詞不変化詞結合(verb-particle combinations, VPC)の下位類には、不変化詞がアスペクトの意味を持つ Aspectual VPC(例: drink up)と、全体の意味を構成要素に還元できない Idiomatic VPC(例: look up)の2種類がある。両者は顕在的な接辞を付加できる点で共通する (例: drinkupable, look-upable) 一方、前者は名詞への転換が不可能なのに対し、後者は可能な点で異なる (例: *a drink-up, a look-up)。もし転換が非顕在的な接辞を添加することによるゼロ派生であるなら、2種類の VPC は顕在的な接辞に対しては同様に振る舞うのに対し、非顕

在的な接辞に対しては異なる振る舞いを見せるのはなぜかという問いが生じる。本発表では Emonds (2000[1])が提案する多段階語彙挿入(Multi-Level Lexical Insertion)の枠組みから2種類のVPCの派生上の違いを示した上で、名詞転換をLexiconの下位部門であるDictionaryで行われるRelisting (Lieber (1992[2]他))であると主張し、上記の問いに答える。

[1] *Lexicon and Grammar: The English Syntacticon* [2] *Deconstructing Morphology: Word Formation in Syntactic Theory*

「可能を表す *ar* 動詞における接尾辞 *ar* の形態統語的役割について」

高橋英也 (岩手県立大学)
新沼史和 (盛岡大学)

日本語の動詞の他交替において重要な1つの問題は、交替が派生的であるかどうかということである。すなわち、(i)自動詞から他動詞、あるいは、他動詞から自動詞への派生関係にあるのか、(ii)それとも、同じ語根から自動詞と他動詞がそれぞれ形成されるのかという問題である。それに関連して、どのような操作によって一対の自動詞と他動詞が成立するのかということが、さらに問題となる。本発表では、分散形態論の枠組みを想定して(ii)の立場に立ち、特に、可能の意味を表す *ar* 動詞(西尾(1954 [1]))の統語形態論に焦点を当てて考察を行う。具体的には、接尾辞 *ar* が動詞化子であると仮定し、外項の認可・具現化に関して、上位の機能範疇 Voice との相互作用において2つの別個の振る舞いを示すことを論じる。そして、本発表で提示される分析が、可能が自発に由来するという伝統的洞察と一致することを示す。

[1] 西尾寅彌(1954)「動詞の派生について—一他対立の型による—」『国語学』17: 105-117.

第七室 (11月9日午前～午後)

司会 高橋英光 (北海道大学)

「英語の動詞 *sigh* の意味論」

小早川 暁 (獨協大学)

英語の動詞 *sigh* に対して英英辞典が与える語釈は2種類に大別できる。息の出入りに関して〈吸う〉と〈吐く〉の両方を含む語釈(OALD 8, LDOCE 6)と〈吐く〉のみを含む語釈(COBUILD 7, CALD 4, MEDAL 2)である。これらには、それぞれ裏付けを与えることができ、どちらの語釈も事実を捉えたものであると言えるが、本発表では二つの見方を統合する方途を求める。端的に言うと、〈吸う〉と〈吐く〉を単位とする繰り返しから成る呼吸ドメインを措定し、*sigh* はその一部である〈吐く〉をプロファイルすることを明らかにする (cf. [1] [2])。このように考えることにより、たとえば、*sigh and breathe out* よりも *sigh and breathe in* の方が多く見つかるという事実や *breathe out and sigh* よりも *breathe in and sigh* の方が多く見つかるという事実の説明を与えることができる (cf. [3])。

[1] Taylor, J. R. (2003) *Linguistic Categorization*, OUP. [2] Croft, W. (2009) “Connecting Frames and Constructions,” *Constructions and Frames* 1. [3] Talmy, L. (2000) *Toward a Cognitive Semantics*, MIT Press.

「前置詞の補語句として用いられる前置詞句の名詞的用法について」

大谷直輝 (京都市立大学)

本研究では、前置詞の補語句として用いられる前置詞句の名詞的用法 (*from under NP, until after NP*, など) が持つ文法的・意味的特徴を、*The British National Corpus* を用いた定量的な調査を通じて明らかにする。前置詞句には名詞的に振舞い、他の前置詞の補語句となる用法が存在するが、前置詞の組み合わせは限られている。本研究では、2つの事例研究を通じて、[前置詞][前置詞][名詞句]の連鎖に見られる傾向を明らかにし、前置詞の補語句として用いられる前置詞句が持つ特徴を動機づける要因を認知言語学の観点から分析する。

調査の結果、第一に、主要部となるのは他の前置詞に比べ、*from* が圧倒的に多い点、第二に、*from* に後続するのは、*under* を除き、二音節以上の *a-, be-* などの接頭辞を持つ前置詞である点、第三に、前置詞句の補語となる前置詞句には、先行研究で指摘されている空

間的意味と時間的意味以外にも、集団や組織などを表す抽象的意味 (*from amongst the members*) が観察される点が明らかになった。

[1] 有村兼彬(1987)「前置詞句主語について」『英語青年』4, 22. [2] 出原健一(1998)「前置詞句主語構文に関する一考察：認知文法とアフォーダンス理論」『人文科学論集』32: 25-36.

司会 金澤俊吾 (高知県立大学)

「仮想移動を表わす不変化詞 *down*—発話者の視線と認知的縮小の観点から—

濱上桂菜 (大阪大学大学院)

本発表では、次の (1b) と (2) のように、下方向の移動を含意しない英語不変化詞 *down* 各種を取り扱う。

(1) He walked down to the station.

(a) 彼は坂を下って駅まで歩いて行った。

(b) 彼はまっすぐ歩いて駅に行った。

(2) He saw Mary down at the station.

彼は、すぐその駅でメアリーに出会った。

例文 (1) における *down* は、坂道を下るなどして下方向の移動を意味する場合がある [= (1a)]。一方で、下方向とは関係ない直線移動も意味しえる [= (1b)]。また (2) に関しても、*down* の使用によって「駅が発話現場から近い」、あるいは「駅が話者にとって馴染み深い場所である」ことが表され、下方向とは全く関係のないことを意味する。

そこで、本発表では、これらの *down* がどのようにして「下方向」の意味を失うのか、また、これらの *down* がどのような関係にあるのかを明らかにする。

[1] Langacker (1990) “Subjectification.” *Cognitive Linguistics* 1. [2] Talmy (2000) *Toward a Cognitive Semantics - Vol. 1*.

「使役移動構文と結果構文における心理的変化を表す用法の意味的特性」

中尾朋子 (大阪大学大学院)

本発表では、感情を表す名詞を目的語とする使役移動構文 (例: *The news struck fear into him.*) と、感情を表す名詞を前置詞句の目的語

とする結果構文(例: *The news threw him into a panic.*)の2種類の心理的な変化を表す構文のタイプを対象として、構文文法(Goldberg (1995[1]) etc.)の観点より、それぞれの意味的特性を考察する。これらの構文タイプは、形式は[V NP PP]であり、どちらも「人のある心理状態にさせる(“to make someone feel some emotion or feeling”）」という意味を表し、感情語が生起するという点で類似している。2つの構文と共起する感情語の種類に注目し、その構文事例を確認・考察し、一般に論じられている使役移動構文と結果構文の持つ意味的特性に関連づけることで2種類の構文タイプの相違を捉えることを試みる。また、結果構文と使役移動構文の関係についても触れるつもりである。

[1] *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.

「連結的知覚動詞の使い分けと認知プロセス：*look* と *appear* のテキスト内生起順序をめぐって」

徳山聖美 (神戸市外国語大学大学院)

視覚に関する構文(*John looks/appears happy.*) (谷口 2005 など[1]-[3])において、英語母語話者が無意識に行っている動詞選択の認知的動機づけを、以下の2点から考察する。

①同一コンテキストにおける *look* と *appear* の生起順序に着目し、*look* 先行が *appear* 先行より量的に多い事実を示し、質的な分析から、それが心理学で言われている選好注視に見られる、私たちのデフォルトの認知の流れが言語事実にも反映されていることを示す。②形容詞補語の比較級(*look/appear younger* 等)が、*look* より *appear* と多く共起する事実から、知覚主体が判断・評価した「対象の見え」と実質との乖離がより大きい場合を *appear* が受け持つ傾向があることを、具体的な実例をもとに示す。以上のことから、両者の使い分けは外部世界に対する私たちの認知プロセスの反映であることを明らかにする。

[1] 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』 [2] 本多啓(2005)『アフォーダンスの認知意味論』 [3] 徳山(2013)「構文の発達と動

詞の認知的分業』『認知言語学論考』11.

第八室 (11月9日午前～午後)

司会 山本武史 (近畿大学)

“Production of an Allophonic Variant in a Second Language: The Case of Intervocalic Alveolar Flapping”

Keiichi Tajima (Hosei University)
Mafuyu Kitahara (Waseda University)
Kiyoko Yoneyama (Daito Bunka University)

Alveolar stops in North American English are often produced as alveolar flaps in words such as *letter* and *rider*. While such flaps are allophonic variants that do not signal lexical contrasts, many non-native learners may still wish to learn them, particularly if they want to sound native-like. The present study investigated how well Japanese learners of English produced English alveolar flaps. First, a corpus analysis of English sentences spoken by university students across Japan revealed that Japanese students typically do not exhibit flapping at all. Second, a production study was conducted in which Japanese speakers who had lived in North America read English materials that contained potentially flappable stops. Preliminary results suggest that these speakers often exhibit flapping, and that the rate of flapping is mildly related to factors such as the length of time spent in English-speaking communities.

「日本人大学生英語学習者の英語の /ɹ/ と /l/ の知覚における相対的語彙親密度の影響について」

米山聖子 (大東文化大学)
中村祐輔 (大宮東高校)

Flege, Takagi and Mann (1996)は米国に滞在する日本語母語話者を対象とした英語の語頭の /ɹ/ と /l/ の二肢強制選択法による同定実験を行い、 /ɹ/ と /l/ の音素認識は主観的語彙親密度よりも相対的語彙親密度に影響を受けていることを明らかにした。しかしながら、相対的語彙親密度が主観的語彙親密度から間接的に得られたことを理由に、Flege *et al.* (1996)は相対的語彙親密度の測定方法の検証の必要性を述べている。本研究ではFlege *et al.* (1996)で提

案されている語彙親密度の測定方法を採用し、日本人大学生英語学習者を対象とした Flege *et al.* (1996) の同様の同定実験を実施することで相対的語彙親密度の妥当性を再検討した。実験結果から、対的語彙親密度と絶対的語彙親密度は互いに強い相関があるが、相対的語彙親密度の方が /ɹ/ と /l/ の音素認識正答率を予測する要因であることが明らかになった。また、相対的語彙親密度の低い単語よりも相対的語彙親密度の高い単語の方が、音素認識正答率が高いことが明らかになった。

司会 村田和代 (龍谷大学)

「文法と談話のインターフェイス：「孤独な」if 節をめぐって」

吉田悦子 (三重大学)

本発表の目的は、後続の主節を前提としないう英語の条件節が「孤独な」独立節を形成していることに注目し、文法と談話のインターフェイスを実現する語用論的なメカニズムの一端を明らかにすることである。こうした if 節の働きは、「不完全」な「省略」ではなく、相互行為に基づく構文パターンとして慣用化されていく過程を含んでおり、談話の展開に応じた節連鎖を形成していると考えられる (Miller and Weinert (1998[1]; Miller(2011[2])). 分析は、自然会話データの観察に基づき、標準英語、非標準的変種、フィンランド語 *jos* 'if' 節 (Laury(2012[3]), 対応する日本語における類似の構文形式などを比較する方法をとる。そして、こうした独立節 if 節は、指示や、要求、提案という発話行為を伝達しながら、聞き手の反応をとらえようとする相互行為的な働きと密接に結びついていることを指摘する。さらにこうした従属節の主節化ともいえる現象は、談話の開始部や転換部の合図として機能していることを主張する。

[1] *Spontaneous Spoken Language: Syntax and Discourse*, OUP. [2] *A Critical Introduction to Syntax*, Continuum. [3] 'Syntactically Non-Integrated Finnish *jos*'if' Conditional Clauses as Directives', DP49.

「2種類の it is (just) that 節構文」

佐藤翔馬 (名古屋大学大学院)

Nobody has invited me to dance. It is that I

am not pretty enough. (Declerck (1992: 209 [1])) のような例は *it is that* 節構文と呼ばれる。Declerckによると、この構文には原因・理由を提示する機能があるという。また、副詞 *just* を伴い、*It's just that S* となっている例も見られる。本研究では、副詞 *just* を伴うものと伴わないものを合わせて「*it is (just) that* 節構文」と呼ぶ。Bolinger (1972 [2]) は、補文標識 *that* の省略が許されない **It's he can't make up his mind.* と、省略が許される *It's just he can't make up his mind.* はそれぞれ別の構文であると主張している。本研究は、Bolingerが示した「補文標識 *that*」に加え、「付加疑問文」、「副詞 *just*」といった証拠に基づき、*it is (just) that* 節構文を2種類に分類する。その2種類とは、既出の事柄に対して原因・理由を提示するType Aと、副詞 *just* を義務的に伴い、*it's just that* が全体として副詞句のように機能するType Bである。

[1] "The inferential *it is that*-construction and its congeners," *Lingua* 87, 203-230. [2] *That's That*, The Hague, Mouton.

「ワード・サーチを伴う指示について」

須賀あゆみ (奈良女子大学)

会話の話し手は受け手の反応をみながら発話や行動を随時調整しているとして、会話を相互行為と捉える視点が昨今着目されている。本発表ではこのような相互行為の視座に基づき、話し手が対象を指示する上で困難に直面したときに顕在化する指示交渉に注目し (Sacks & Schegloff (1979 [1]), Hayashi (2005[2])), 指示が相互行為を通して確立する側面を記述する。具体的には、日本語会話に生じたワード・サーチを伴う事例から、話し手の指示表現の産出が困難な状況においても、受け手の協力により指示対象の属性に関する知識や指示対象に関わる経験に基づいて指示対象の理解がなされうること、会話の進行性や主活動の達成のために指示交渉が調整されうることを示す。本研究により、指示が必ずしも言語表現によって保障されるわけではないこと、指示を相互行為的活動として捉える視点の有効性が示唆される。

[1] "Two Preferences in the Organization of Reference to Persons in Conversation" [2] "Referential Problems and Turn Construction"

〈シンポジウム〉

A室 (11月8日午後)

「言語系学会は、学問研究の成果を、今、どのような形で社会に還元することができるか?—言語教育への貢献を巡って」

司会 岡田伸夫 (関西外国語大学)

大学は、大学生の教育と学問の研究を目的として存在し、その活動に関して、ステークホルダーである国民や社会に説明責任を負っている。言語系学会の会員の多くは大学教員であり、日頃は言語研究の成果をコースワークや論文指導等を通して学生に提供することにより、説明責任を果たしているが、それ以外にも、例えば、小・中・高の英語教員への新しい文法や教授法の提供、翻訳、法廷通訳、市民講座等での講演、手話指導、震災時の外国人に対する情報提供等、多種多様な活動を通して社会に貢献している。本シンポジウムでは、言語系学会に所属する三人の講師が、言語研究の成果を言語教育の発展にどのように活かすかについて、学会の一会員として私見を述べる。本シンポジウムが、言語系学会の社会貢献の在り方を探る場となるとともに、大学や自らの学会の存在意義について再考する場となることを期待する。

「小学校英語の教科化について考える」

講師 伊東治己 (鳴門教育大学)

文部科学省が2013年12月13日に発表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」によると、2020年度をめどに、現在小学校高学年で実施されている外国語活動を小学校中学年に前倒しし、高学年では専科教員を積極的に活用することによって、小学校英語の教科化を図り、読むことや書くことも含めた初歩的な英語の運用能力を養うという方向性が明らかとなった。現在、この改革案を実施に移すための諸準備が進められているが、教科化に対する賛否が新聞や専門誌の紙面を飾ることがあっても、教科化そのものに関する理念や哲学が語られることは少ない。本発表では、まず教科化に対して賛成のスタンスを明らかにし、英語教育学を専門に研究して

きた立場から、小学校英語の教科化の理念について、初等教育・言語教育・外国語教育の観点から、過去10年間、継続してきたフィンランドの小学校英語教育研究の成果も交え、持論を展開して行きたい。

「第二言語習得理論の中高英語教育への応用」

講師 村野井 仁 (東北学院大学)

第二言語習得研究は人間の母語以外の言語習得を記述し、説明しようとする認知科学の一つの分野である。第二言語教育及び学習への貢献を第1の目的としたものではない。しかし、その研究成果の多くは言語教師が自分の指導を見直す上で示唆に富む。これは医師にとって生理学や病理学などの人間の身体そのものについての知識が臨床での治療に大いなる意味を持つと同様であると考えられる。特に、教室環境での第二言語習得・学習を研究対象とした instructed SLA research の成果からは指導の在り方を考えるための重要な知見を得ることができる。

本発表では、focus on form 及び CLIL (内容言語統合型学習) などの学習内容を重視しながら学習者の中間言語システムを育てることをねらった指導原理及び指導方法に焦点を当て、日本の中学・高校における英語指導に第二言語習得研究の成果をどのように応用することが可能なか具体例を提示したい。

「英文法研究の成果を大学英語教育に活かす」

講師 岡田伸夫 (関西外国語大学)

英文法は英語の形式と意味をつなぐ知識である。大学英語教員の中には英文法を教えている意識を持たない者が少なくない。確かに、高校で学習した構文や語句だけからなるテキストを使う場合には、内容に関する種々の学習活動が中心になるので、文法指導は不要かもしれない。あるいは、文法指導を、伝統的な文法規則を伝統的な文法用語を用いて、文脈や場面を考慮せずに、演繹的、顕在的に教える指導法と同一視する傾向が強いために、別の方法で文法を教えていても、文法を教えていると意識しにくいかもしれない。しか

し、大学生が出会う生の英語の中には、高校で教わらない構文が出てくることも少なくない。また、大学生自身は目の構文を知っているつもりでいても、実際に知っているのは構文の形式だけで、意味や機能については部分的にしか知らないこともある。本発表では、英文法研究の成果を大学の英文法指導に活かす方法を具体例を挙げて示す。

B 室 (11月8日午後)

“Discourse Expressions and Information Structure”

Osamu Sawada (Mie University)

In this symposium, we will investigate the meaning and use of expressions that are relevant to information structure and discourse context. More specifically, we will look at various discourse-pragmatic phenomena related to discourse particles, politeness, context-shift, information update, expressives, conventional implicature, and presupposition, and consider the following questions: (i) How can we analyze the meaning/use of discourse-oriented expressions in a formal/theoretical way? (ii) What role do the discourse expressions play in a speaker-hearer interaction or soliloquy? (iii) How is the information of an utterance updated? (iv) How can we analyze the cross-linguistic/language-internal variation in the meaning of discourse expressions? (v) What do the discourse expressions suggest for interface theories (i.e., the interfaces among morphology, syntax, semantics, pragmatics, or phonology)?

“Contextual Relations and Pragmatic Constraints”

Christopher Davis (University of the Ryukyus)

Dynamic semantics models the meaning of a sentence in terms of its context change potential (CCP), typically modeled as a function from contexts to contexts, so that a sentence determines one unique output context for a given input context. I argue that CCP meanings should instead

be modeled as relations between contexts, in which for a given input context there will generally be more than one possible output context. This gives a non-deterministic dynamic theory, in which a CCP constrains the range of output contexts compatible with the update semantics of a sentence, but does not uniquely determine a single output context. I then propose that the resulting non-deterministic input-output relation is filtered by a set of pragmatic constraints that serve to rank the set of possible output contexts, using tools familiar from constraint-based theories in phonology.

“Shared Knowledge, Soliloquy, and the Functions of the Discourse Particles

(*Yo*)*ne* and (*Yo*)*na*”

David Y. Oshima (Nagoya University)

Japanese has several expressions that are characteristic to soliloquy; a paradigmatic example is the discourse particle *na*, as in “Onaka *suita-na* (I’m hungry)”. Such expressions are also used in so-called “pseudo-soliloquy (*giji dokuwawa*)” – a type of speech that constitutes part of dialogue and yet is presented as if it were part of monologue. “Onaka *suita-na*”, for example, can be an utterance by which the speaker informs the hearer about his feeling in a self-effacing way (“I’m hungry – not that I’m asking you to do anything about it”). I will (i) discuss the typology and *raison d’être* of soliloquy/pseudo-soliloquy, and (ii) argue that the particles (*yo*)*ne* and (*yo*)*na* have a function to indicate a markedness of the utterance, i.e., that either (i) it is part of soliloquy, or (ii) it presupposes that the hearer already knows the propositional content.

“Comparison and Goal-shifting”

Osamu Sawada (Mie University)

This talk investigates the pragmatic use of the Japanese expression *sore-yori* ‘lit. than it.’ The pragmatic use of *sore-yori* is different from its semantic use in that it functions as a topic-changing indicator (Kawabata 2002). I argue that the topic changing *sore-yori* conventionally

implicates that the goal related to an at-issue utterance is more preferable than the goal related to a previous utterance. However, I will also observe that *sore-yori* can compare utterances that pertain to the same goal. I argue that whether *sore-yori* serves to shift a goal or not is determined by the extent to which the two compared utterances are relevant. This paper shows that the pragmatic *sore-yori* is multifunctional and it not only enables a speaker to signal a better move toward a goal, but also enables him or her to signal a better goal.

[1] Kawabata, M. (2002) *Ridatu kara tenkan e* (*Sore-yori* as a topic-changing function). *Kokugogaku* 53.

“Politeness and Expressivity”

Eric McCready (Aoyama Gakuin University)

Honorific expressions are common in the world’s languages, but have received relatively little attention in formal semantics and pragmatics. A theory of the meaning of honorifics must address their denotations, how those denotations figure in semantic composition, and how the resulting meanings behave in pragmatic terms. This talk focuses on the second and third of these questions. It is widely accepted that the denotations of honorifics are expressive in nature, but there is little consensus on exactly what sort of meanings they actually express. I propose an expressive theory of honorific meanings in which honorifics are taken simultaneously to check and modify a contextually specified range of appropriately formal speech derived from several parameters associated with the process of honorific choice. The final part of the talk briefly explores how the resulting theory interacts with game-theoretic notions of rational communication.

C室 (11月9日午後)

「頻度と言語研究を考える」

司会 高橋英光 (北海道大学)

頻度が言語研究にとって重要な意義を持つ

ことが近年明らかになっているが、頻度の扱いをめぐる論争も浮上している。本シンポジウムは、頻度と言語研究に関する諸現象・諸問題を多面的に取り上げる機会としたい。

大橋講師は、言語変化に頻度が与える影響を論じる。具体的には、英語の名詞由来の強意副詞句を取りあげ、カテゴリーシフト、構文化、意味変化などが特定の文脈、意味での使用頻度の増加に動機づけられていることを実証的に示す。

高橋講師は、構文研究の新しい研究方法であるコロストラクション分析を取り上げる。具体的には英語命令文を例にとり、コロストラクション分析の結果と単純頻度分析のそれを比較する。

長谷部講師は、いわゆるメンタル・コーパスの考え方の可能性と制約について論じる。大規模言語コーパスのデータを母語話者が脳内に持つ言語知識になぞらえることは言語研究に新しい視点を提供してくれるが、そこには適用範囲があることを示す。

「頻度基盤による分析

—英語強意副詞句の変化を例に—

講師 大橋 浩 (九州大学)

近年、使用基盤による言語研究の蓄積が進むにつれ、言語変化と頻度の不可分な関係が実証的に明らかにされてきた。本発表では、all you want や big time などの名詞由来の強意副詞句を取り上げ、名詞から副詞へのカテゴリーシフト、構文化 ([1], [2]など)、共起語句の変化といった現象がこれらの表現の使用頻度に動機づけられていることを論じたい。特に、特定の文脈における使用頻度の増加が意味的拡張をうながし、その拡張的な新しい意味での使用頻度の増加が表現自体の使用頻度の増加をうながす self-feeding な効果 ([3]など) によって新たな意味が拡張し定着していくプロセスを、コーパスからの収集例の分析を通して浮き彫りにし、頻度を基盤とした分析の有効性を示したい。

[1] Traugott, Elizabeth Closs and Graeme Trousdale. 2013. *Constructionalization and Constructional Changes*. Oxford University Press.
[2] Hilpert, Martin. 2013. *Constructional Change*

in English. Cambridge University Press. [3] Bybee, Joan. 2010. *Language, Usage and Cognition*. Cambridge University Press.

「コロストラクション分析の落とし穴」

講師 高橋英光 (北海道大学)

ステファノ ヴイッチとグリース(以下、S&G)が開発したコロストラクションの概念とその分析法[1]は構文と語彙の結びつきの強さ・反発の程度を算定して構文を特徴付ける新しい研究プロジェクトとして注目されている。本発表では、英語命令文を例に取りコロストラクション分析([1])の結果と単純使用頻度分析([2])のそれを比較する。結論として、(i) S&G はコロストラクション分析が構文の意味を同定するための「客観的アプローチを提供する」([1])と主張するが、彼らの「客観性」の理論的根拠が不明であること([2]と[3])、(ii) S&G がコロストラクション分析の成果として挙げている主な知見は単純頻度分析から簡単かつ適切に得られること([2])、(iii) コロストラクション分析は構文の重要な特徴を見落とすデメリットがあること、を述べる。

[1] Stefanowitch, Anatol & Stefan Th. Gries. 2003. “Collostructions: Investigating the interaction of words and constructions.” *International Journal of Corpus Linguistics* 8:2, 209–243. [2] Takahashi, Hidemitsu. 2012. *A Cognitive Linguistic analysis of the English imperative: With special reference to Japanese imperatives*. John Benjamins. [3] Bybee, Joan. 2010. *Language, usage and cognition*. Cambridge University Press.

「メンタル・コーパスという概念的構築物」

講師 長谷部陽一郎 (同志社大学)

テイラーは[1]の中で、言語知識は一種のコーパスであり、表現の構成性や選好性は、この「メンタル・コーパス」から得られる頻度情報に概ね対応するという仮説を示した。使用依拠の立場をとる研究者にとってこの仮説は魅力的に映る。なぜならそれは計算機上のコーパスを言語知識のサンプルと仮定することで、構文やプロトタイプ性といった概念を客観的に規定できる可能性を示唆するからで

ある。事実、ジャンダが[2]で示したように、近年、認知言語学の枠組みで行われる研究にはコーパスや統計的手法を活用したものが急増している。しかし話者の言語知識はいかなるコーパスとも同じではなく、頻度情報だけで構成されているわけでもない。そこで本発表では、有意差検定や相関・回帰分析など認知言語学研究で広く用いられつつある統計的手法を取り上げ、それらが話者の言語知識のどの部分を浮き彫りにし、どの部分について多くを語らないのかを明らかにする。

[1] Taylor, John R. 2012. *The Mental Corpus: How Language is Represented in Mind*. Oxford University Press.

[2] Janda, Laura A. 2013. "Quantitative Methods in Cognitive Linguistics." L. A. Janda (Ed.) *Cognitive Linguistics: The Quantitative Turn*. Mouton de Gruyter. 1-32.

D室 (11月9日午後)

「動詞句とその周辺をめぐる：語彙範疇と機能範疇の役割」

司会 長谷川信子 (神田外語大学)

生成統語論は、述語の意味 (項構造) の文構造への投射のメカニズムの追究がその基盤にある。近年のミニマリストや Cartography では、構造構築を担うことから機能範疇に焦点が移ってきているが、語彙範疇 (VP) の持つ事態的意味が、いかに vP、TP、CP といった機能範疇と関わり、その際、いかに、時制、相、演算子の作用域、発話行為的機能などが組み込まれるかなどの考察は十分には深められていない。

本シンポジウムでは、機能範疇の役割とメカニズムを、特に、動詞句が持つ情報の文構造への具現に焦点をあて、藤田講師が生物言語学の観点から、西山講師が日本語の述語の形態のあり方から、石塚講師が Voice、特に日本語の受動態の統一的な分析から、長谷川が文の aspekto、特に状態性と総称性の観点からそれぞれ考察し、動詞句の情報がその上位の機能範疇と関わることで、何が保持され、何が変化し得るのかを考えてみたい。

「言語進化から見た動詞句」

講師 藤田耕司 (京都大学)

従来型の記述・理論言語学と生物・進化言語学の乖離状態を改善するため、近年のミニマリズム ([1]他) に基づく動詞句研究が言語進化研究に対して持ち得る意義を考察する。個々の動詞はルート部と v や Voice 等の機能範疇の結合による統語的複合体であり、これを基体とする動詞句構造の構築が人間の事象・概念理解に繋がると考える ([2]他)。このことから、(1)語彙を含め、人間言語の生成的プロセスはすべて Merge によって行われる、(2)Merge の創発が人間固有の言語・認知を可能にする、(3)語彙進化と統語進化は同一の現象であって両者を個別に説明する必要はない、(4)CI インターフェイスは不要である、等を主張する。さらに時間が許せば、Merge の運動制御起源説 ([3]他) について新たな角度から検討を加える ([4]他)。

[1] N. Chomsky. 2014. "Problems of Projection: Extensions." [2] K. Fujita. 2014. In T. Roeper & M. Speas (eds.) *Recursion*. Springer. [3] 藤田. 2012. 藤田・岡ノ谷(編) 『進化言語学の構築』 ひつじ書房. [4] C. Boeckx & K. Fujita. 2014. *Front. Psychol.* 5.

「文の三層構造から見た日本語動詞の活用形」

講師 西山國雄 (茨城大学)

本発表は日本語動詞の活用形が、それぞれ VP、TP、CP のどの領域に対応するかを検討する。VP に相当するのは語根だが、これは日本語では拘束形なので、様々な接尾辞がついていわゆる活用形ができる。「食べる」のような終止形は TP、命令形の「食べろ」は CP の領域と考えられる。「勝ちたい」などに出る連用形は、補文の TP であると分析される。これは補文が主文とは別の時の副詞を認可できることから支持される。同様に「勝て(ば)」のような仮定形も、条件節なので TP と考えられる。未然形については、否定の「行かない」を ik-ana-i と分析すれば、未然形は理論的には存在しないことになる。しかし古語では「行けば (確定) と「行かば (仮定) の

対比があったので、ik-e/a-ba と形態分析され、TP とみなされる。連体形は CP だが、これも古語を形態分析することで新たな視点が得られる。

“What does VOICE_{PASS} -rare Do?”

Tomoko Ishizuka (Tama University)

This talk reanalyzes Japanese passives, taking a modular approach in which passivization is brought about by the lexical properties of the passive morpheme *-rare* interacting with general properties of Japanese (see [1]). Japanese passives are rich and unique, not matching the universal characteristics of the passive voice. Namely, *-rare* appears to both decrease and increase valency—known as direct and indirect passives respectively. This has long been an unsolved puzzle. Extending Collins’ smuggling analysis of English passives ([2]) to Japanese, I will show if we assume that *-rare* has an EPP feature that attracts VP, rather than a feature absorbing structural Case, we can achieve a unified treatment of Japanese passives.

[1] Jaeggli, O. (1986) “Passive.” *LI* 17(4): 587-622. [2] Collins, C. 2005. “A smuggling approach to the passive in English.” *Syntax* 8: 81-120.

「文のアスペクト：動作主の欠落と状態性」

講師 長谷川信子 (神田外語大学)

動作主の有無は、動詞句と関わる機能範疇 vP の性質により決定され、自他の違いを説明する[1]。しかし中間態のような他動詞でも動作主が具現しない構文は v の性質では説明がつかない。中間態も含め総称文は一般に動作主が生起できないが、本論文では、その分析に vP と TP の間に AspP を想定し、AspP がその指定部に VP を smuggle させることを許し、結果として動作主が認可されなくなると論じ、文の総称性解釈は文タイプ (Force) からの指令が FinP-TP-AspP へと伝わることで可能となることを示す。AspP は日本語ではテイルと関わるが、指定部に VP を smuggle させるか動作主を取るかによりテイルの 2 つの解釈 (進行継続と結果継続) が可能となる。

smuggling は Collins [2]および本シンポジウムでの石塚講師の分析の受動態だけでなく、AspP も含め、動詞句内の要素の文構造への具現と関わり、格認可とは別に、広く許されるべき統語操作であることを論じる。

[1] Hasegawa, N. 2004 ‘Unaccusative’ transitives and Burzio’s generalization. *WAFL* 1, *MITWPL* 46. [2] Collins, C. 2005 A smuggling approach to the passive in English, *Syntax* 8.

E 室 (11 月 9 日午後)

「言語変化に対する多角的アプローチ」

司会 大村光弘 (静岡大学)

言語変化の研究における近年の動向を見てみると、ある変化が生じたという事実の記述だけでなく、当該変化の理由や動機づけ、さらにはメカニズムの解明が求められているように思われる。実際この流れのなかで、言語変化に取り組む言語学の諸分野がそれぞれの利点を生かしながら、歴史言語学の領域に大きく貢献する成果を収めてきた。

本シンポジウムでは、生成文法 (統語論) [縄田講師担当]、認知言語学・構文文法 [石崎講師担当]、機能文法 (階層意味論・語用論) [大村担当] といった分野の立場から、それぞれのアプローチが得意とする言語現象を分析し、当該変化の動機とメカニズムを明らかにする。今回のシンポジウムの目的は、言語変化の要因やプロセスは複雑であり、いずれかの言語理論によって全ての言語現象が説明できるのではなく、相互に補完的であることを示唆することにある。

「言語変化の意味論的・語用論的分析

— (相互) 主観化を中心に —

講師 大村光弘 (静岡大学)

本発表では、(I’m) afraid と (I) hope の歴史的発達を調査し、これらの言語表現の機能が命題内容の一部を形成する要素から命題態度に関わる要素へと変化し、更には命題態度を表す要素から発話伝達態度に関わる要素へと変化したことを明らかにする。さらに、この変化が主観化を軸とした文法化の一例であるこ

とを示すとともに、当該変化の動機づけとメカニズムを、モダリティ(中右(1994 [1])), 発話階層構造(中右(1994 [1]), Hengeveld(1990 [2]), 語用論的強化(Heine et al. (1991[3]), Hopper & Traugott (1993[4]), Traugott & Dasher (2002 [5]))といった意味論的、語用論的観点から分析・提案する。

[1]『認知意味論の原理』 [2]“The hierarchical structure of utterances”, *Layers and Levels of Representation in Language Theory*. [3] *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. [4] *Grammaticalization*. [5] *Regularity in Semantic Change*.

「認知言語学の視点からの通時的言語変化」

講師 石崎保明 (南山大学短期大学部)

ヒトがもつ認知能力を言語現象の説明基盤とする認知言語学や構文文法理論は、言語理論における大きな潮流をなしている。しかしながら、その扱われる言語資料の大半は、現代の話者が日常的に用いているものであり、言語の通時的変化に対するこれらの適用可能性が本格的に議論され始めたのは、最近になってからのことである(Trousdale and Gisborne (2008 [1]), Bybee (2010 [2])など)。

本発表では、英語の前置詞(句)や副詞(句)を伴ういくつかの表現を取り上げ、歴史言語資料を扱った電子コーパスを援用しながら、それらの通時的な発達過程を用法基盤モデル(Usage-Based Model)に基づき分析を試みる。また、本発表では、言語変化における使用文脈の重要性を指摘するとともに、文法化や語彙化といった言語変化の方向性についても、頻度効果による分析が有効であることを示したいと考えている。

[1] *Constructional Approaches to English Grammar*. [2] *Language, Usage, and Cognition*.

「統語的変異の出現と収束」

講師 縄田裕幸 (島根大学)

生成統語論に基づく言語変化分析では、複数の統語的変異がある時代の話者において共存する現象が問題となることがある。本発表では英語の主語位置の通時的変遷を取り上げ、以下の統語的変異の出現と収束が Nawata

(2009 [1]) で提案されている一致素性のパラメタ変化の予測を裏付けるものであることを論じる。(i) 古英語・初期中英語では2つの統語位置が主語の定性に応じて使い分けられていた(Kemenade and Los (2006 [2])). (ii) 後期中英語・初期近代英語では主語の定性に関わらず2つの主語位置が自由変異として用いられていた。(iii) 近代英語期に2つの主語位置は1つに収束した。議論の中で、極小主義におけるパラメタの位置づけについても論じる予定である。

[1] “Clausal Architecture and Inflectional Paradigm” *EL* 20, 247-283. [2] “Discourse Adverbs and Clausal Syntax in Old and Middle English,” *The Handbook of the History of English*.

F室 (11月9日午後)

「ナラティブ研究における社会貢献の可能性を巡って」

司会 秦かおり (大阪大学)

近年、研究成果を還元し社会貢献を行うことはどの研究分野においても重要な課題である。そこで、本シンポジウムではナラティブ研究における社会貢献の可能性を考えたい。

ここでいうナラティブとは相互行為としてのトークであり、今-この場で協働的に構築されるものである。そこで交渉・(再)構築されるのは、話者同士の関係性、アイデンティティ、規範意識、社会規範などさまざまであり、本シンポジウムの3件の発表はこれらを顕在化させる。最初の発表は東日本大震災に関するインタビューに立ち現れる在外邦人のアイデンティティを分析し、心の揺れを描く。続く発表は、日英語に現れる母としての規範意識の日米比較である。最後の発表は民族詩学的な視点から語りの構造に焦点をあて、説得/目的達成のための語りの構造が異文化/異民族間で異なる時に起こる問題を指摘する。それぞれが議論すべき社会問題を内包しており、それを聴衆とともに考えていきたい。

「遠隔地から震災を語る—在英邦人女性と 英国人女性のナラティブ分析—」

講師 秦かおり (大阪大学)

本研究は、東日本大震災発生時、英国に在住していた日本人女性にインタビュー調査を行い、遠隔地においてこそ感じられた日本人性の再確認・再構築・アイデンティティの揺れを分析したものである。また、同じコミュニティ在住の英国人女性へのインタビュー調査では、震災当時の在英邦人女性達がどう語られたかを検証し、それと邦人女性のナラティブがどのような関連をもつのかを分析した。この結果、邦人女性達のインタビュー・ナラティブの中に立ち現れたのは、日本から来た調査者を前にした時の共感の協働構築と心理的乖離、英国での居住コミュニティにおいてどう振る舞うべきかという規範意識、他者から期待される（日本人としての）自己認識であった。発表では、これらのマイクロ分析を Positioning 理論や small story 分析を援用しつつ、コミュニケーション資源としての非言語要素も分析する。これらを通して、「被災地」以外にも目を向け、その声に耳を傾ける必要性を考えたい。

De Fina, A. & Georgakopoulou, A. (2012) *Analyzing Narrative: Discourse and Sociolinguistic Perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press.

「語りにもられる「母」としての私 —出産育児体験談の日米比較から—」

講師 井出里咲子 (筑波大学)
岡本多香子 (日本女子
大学 (非常勤))

本研究は日本とアメリカで行われた子どもをもつ女性への出産育児体験のインタビュー・ナラティブの分析から、日米の「母親」を取り巻く社会的規範意識と、その規範が語りを通して再構築される過程を明らかにするものである。具体的には日本語ナラティブに見られる「やりもらい表現」としての授受動詞、英語のナラティブに表出する“I, we, he”といった代名詞を中心とする言語的資源に着目し、語りの中に指標される自己と他者に対す

る評価やスタンスの相違点についてマイクロ分析を行う。またナラティブに表出する「こうあるべき」という規範意識を反映した日本語と英語のキーワードも手がかりに、インタビュー・ナラティブの過程で構築される「母」としての女性の規範意識が、いかに言語によって異なる表出の仕方をするのかを考察する。談話の中に立ち現れる規範意識の分析を通じて、「母」としての女性たちが活躍できる社会とは何かを考えたい。

Hill, J. (2005) Finding culture in narrative. In N. Quinn ed., *Finding Culture in Talk: A Collection of Methods*. New York: Palgrave Macmillan.

「民族詩学的アプローチからみる語りの不 均衡について」

講師 片岡邦好 (愛知大学)

本発表では、Hymes (1996) の提唱した民族詩学的アプローチを用いて、異なる目的達成のためになされた3種類の「語り」を概観・考察する。その端緒としてオバマによる民主党代表選挙における勝利演説 (2008) を取り上げ、合目的な言語活動 (=演説) と日常の語りを詩的特性により仲介する。それに続き、救命講習における日本人指導者の教育的ナラティブと東日本大震災体験者のナラティブに焦点を当てることで、参加者の介入の程度にかかわらず、沈潜する共有された実践の型が存在することを指摘する。一見固定的かつ一方方向的な語りも、実はその実践の型を共有する参加者による共同構築的な行為であり、語りの場に即応した文化的パフォーマンスという特徴を持つ。その知見をもとに、民族詩学的分析が特に異文化/異民族接触場面における齟齬・ミスコミュニケーション・偏見の是正 (Blommaert 2006) に貢献するアプローチとなりうることを提案する。

Blommaert, J. 2006. Applied ethnopoetics. *Narrative Inquiry* 16(1), 181-190. Hymes, D. 1996. *Ethnography, linguistics, narrative inequality*. Bristol, PA: Taylor and Francis.